

初期ラスール朝史研究：宮廷食材をめぐる一考察

馬場，多聞

<https://doi.org/10.15017/1500462>

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：Fulltext available.

論文題目

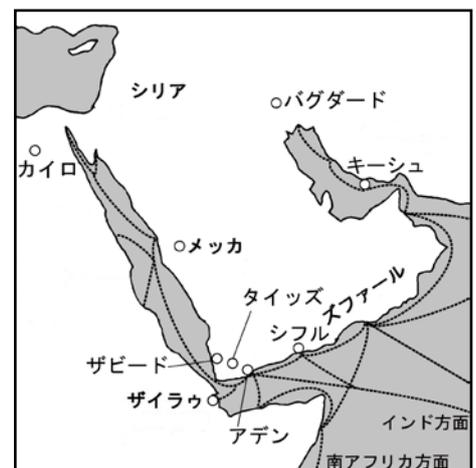
初期ラスール朝史研究 ―宮廷食材をめぐる一考察―

氏名 馬場多聞

論文内容の要旨

初期ラスール朝史研究 ―宮廷食材をめぐる一考察―

13世紀のイエメンに興ったラスール朝（1229-1454）は、ザビードとタイズ、アデンの三都市を拠点に、200余年にわたって南西アラビア一帯を統治した（右図）。ラスール朝の盛衰は、13世紀から14世紀にかけて隆盛し、15世紀に瓦解するという、アブー＝ルゴドの「13世紀世界システム」や、家島彦一の「インド洋海域世界」と、およそ一致した動きを見せる。もっとも世界大ネットワークを論じるこれらの枠組みは、イエメンをネットワークの結節点とみなす一方で、その理由を十分に考察していない。



ラスール朝の社会経済史研究は、インド洋交易史研究の文脈において行われてきた。そこではアデンなどにおける商業の様相に注目が集まり、ラスール朝支配域内の交易網やラスール朝の王権がどのように関わっていたのかといった点を具体的に検討するという視点に欠ける。

本稿では、13世紀末に編纂されたと見られるラスール朝の行政文書集『知識の光』所収の宮廷食材に関する記事群をもとに、上述の問題の解決を目指した。どのような食材がどのように調理されていたのか、それらはどこからどこへ運ばれていたのか、どのような組織や人が食材供給に携わっていたのかといった諸点について同時代史料との比較をもとに究明することで、ラスール朝支配域内外の交易網とラスール朝の王権が相互に影響し合っていた様子を示した。

そのためにまず序論においては、「13世紀システム」や「インド洋海域世界」、ラスール朝史研究の問題点を検討するとともに（上述）、『知識の光』が有する史料上の問題点を詳らかにした。『知識の光』は書物としての一貫性に欠き、また、そこに書かれている事柄が現実を反映していない可能性が高い史料である。しかしながら、『知識の光』そのものの検討や他史料との比較を通して、本稿における考察にとって十分な情報を提供できるものであることが明らかとなった。

そのためにまず序論においては、「13世紀システム」や「インド洋海域世界」、ラスール朝史研究の問題点を検討するとともに（上述）、『知識の光』が有する史料上の問題点を詳らかにした。『知識の光』は書物としての一貫性に欠き、また、そこに書かれている事柄が現実を反映していない可能性が高い史料である。しかしながら、『知識の光』そのものの検討や他史料との比較を通して、本稿における考察にとって十分な情報を提供できるものであることが明らかとなった。

第一部においては、宮廷食材そのものに着目した考察を行った。『知識の光』所収の宮廷食材の一覧を作成し、アデン港課税品目録などの同時代史料と比較することで、宮廷食材の大半が支配下のイエメンにおいて生産されていたこと、エジプトを西端として紅海やインド洋周縁部に点

在する都市からイエメンでは生産できない産物を輸入していたことが、明らかとなった。また、それらの食材をもとにつくられた料理は、同時代他地域においても見られた。料理が給された宴席は、往時のイエメンの中樞がラスール朝宮廷に出現しているという事実を、列席した支配体制内外の人びとが共有する場であった。以上は、13世紀の世界において、海陸に展開する世界大ネットワークが、イエメンを絡み取りながら展開していたことを示す。

第二部においては、イエメン内の交易網に着目した考察を行った。宮廷へ供給された様々な食材の供給元を分析することで、ラスール朝下の諸都市が、周辺地域で生産される特産物の集散地として機能していたことが明らかとなった。それらの諸都市を結ぶ交易網は、前ラスール朝期よりメッカ巡礼道の周辺に発達してきたものであって、特にザビードとタイズ、アデンが、政治的、経済的に重要な役割を担っていた。ラスール朝行政文書集に残された記事や地図からは、それらの作成者にして参照者である宮廷官僚や王族が、この三都市に立脚した世界観を有していたことを読み取った。

第三部においては、王権に着目した考察を行った。宮廷への食材供給を行った宮廷組織の検討を通して、それらが先行する王朝から引き継がれたものであったことが明らかとなった。宮廷へ集積された富は、財や食材として、下賜品や手当のかたちで支配体制内外の人びとへ分配された。ラスール朝の王族のもとで働いていた家内集団は、食材供給の実質的な担い手であると同時に、それらの被分配者でもあった。特に、東アフリカから到来する黒人奴隷や黒人宦官は、ラスール朝支配体制を支える重要な要素となり、ラスール朝の王族から東アフリカにいる頃には得難い現金や地位を手にしていった。

以上を踏まえれば、本博士論文で焦点をあてた「宮廷食材」という事象は、イエメン内交易網ならびに王権によって支えられたラスール朝の殷賑、さらにはラスール朝下の諸港を中樞とした紅海—インド洋交易の隆盛を反映し、これらと互いに影響し合った一事象として位置付けられる。黎明期である13世紀において、ラスール朝がイエメンを支配していくための諸条件は成立し、それらが相互に作用することでそれぞれの維持、強化を促していたことを、宮廷食材をめぐる本稿の考察は解き明かした。このことは同時に、13世紀から14世紀にかけて最盛期を迎えた「13世紀世界システム」や「インド洋海域世界」において、ラスール朝下イエメンが様々なネットワークが交差する結節点として機能したことを示している。